

高校生の部

【高校生の部受賞作】

文書と証言から知る陸軍中央無線電信所船橋送信所の正体

東京学芸大学附属高等学校2年 尾花 嘉月

1. はじめに

筆者は、中学校2年時に千葉県船橋市行田にある「海軍船橋送信所」に関して研究を行った。その際参考にした書籍『行田無線史』¹⁾に「陸軍船橋送信所」の存在が示唆されており（註1）、簡単に調べてみたところ全く情報がなかったことから、興味を持った。中学3年時から、「陸軍船橋送信所」について研究を始め、今まで続けている。

この陸軍船橋送信所は「陸軍中央無線電信所船橋送信所」といい（以下、「陸軍船橋送信所」と呼称することにする）、郷土史家の滝口昭二氏が一件インタビューを行ったのみで、情報も僅かしかなく無名の戦争遺跡である。知られていない戦争遺跡を掘り起こすことはとても価値があると同時に、それを地域に語り継ぐことは自分が住む地域の歴史を深く理解することに繋がると考えている。

そもそも無線電信とは、電線を使用せずに電気信号を送信して情報を伝えるものであり、外交用途や軍事用途で応用された。日本陸軍の通信システムは、大正時代から本格的な整備が始まり、日本国内だけでなく朝鮮や台湾などにも設置が行われている。そして1936年には重要な通信網を取り扱う機関として「陸軍中央無線電信所」が開設されている。しかし、重要情報を扱いながらも陸軍中央無線電信所、とりわけ戦局の悪化に伴い中野から移転された「船橋送信所」はあまりにも情報が少なく、実態は何もわかっていなかった。本研究では郷土史家や周辺住民などへのインタビューと現地調査、公文書と航空写真の分析をもとに、陸軍中央無線電信所の詳細と、船橋送信所の役割と設置の経緯、そして認知されない理由について考察を行っていききたい。

2. 陸軍中央無線電信所

2-1. 組織概要

組織概要は、陸軍無線についてまとめた『日本無線史 第九巻』²⁾で語られている。

陸軍中央無線電信所は日露戦争の教訓を基に設立された陸軍中野無線電信所（現在の明治大学中野キャンパス等）を電報取扱量増加等から拡張したもので、陸軍省内操縦所と中野送信所、赤羽受信所によって構成される。陸軍省内操縦所は、送信内容を管理・発信するもので、それを中野送信所が受け取り、各無線基地に発信する。赤羽受信所は各無線基地からの無線を受信し、陸軍省に伝達する。

赤羽受信所は周辺が陸軍他部隊の軍用地であり拡張ができなかったために満洲事変に伴う電報取扱量増加に対応できず、受信所を調布へ移転した。移転後、赤羽には通信の監視

を行う監督受信所が設置された。また、中野送信所は1940年ごろには周辺の宅地開発が進み、大規模な拡張ができなくなり、また太平洋戦争開戦後には防空部隊の設置に必要な土地拡張ができないことから、1943年ごろに船橋への移転が計画された。しかし、船橋送信所の完成は終戦に間に合わなかった。

前述の『行田無線史』¹⁾には「二和向台にあった陸軍船橋送信所とともに当然駐留軍管理下に入ったのでした。」と記述があり、船橋送信所戦後GHQの監督の下で業務を行っていたと考えられる。

2-2. 指揮系統

『服務規程改定の件』³⁾によれば陸軍中央無線電信所は陸軍大臣直轄の組織であり、工兵中佐が所長を務めている。日中戦争開戦に伴い大本営に陸軍通信隊が設置され、機能が強化されている。この大本営陸軍通信隊は、隊本部、東京通信所、広島通信所で構成され、隊長には陸軍中央無線電信所長と同じ人物が充てられている（註2）。東京通信所は1939年時点では陸軍中央無線電信所と同じ、中央操縦所、中野送信所、赤羽受信所で構成されていた。

この二つの組織には相違点がいくつもある。まず所管が異なっており、陸軍中央無線電信所は陸軍省所管の組織であるが、大本営陸軍部通信隊は運輸通信省（註3）所管の組織であった。つまり、陸軍中央無線電信所は陸軍の戦争指導の下で活用されるが、大本営陸軍部通信隊は大本営が陸海関わらず、国家の戦争指導を行うために使用するものであると考えられる。

歴代の所長で現在確認できるのは、陸軍中央無線電信所開所時に所長を務めた木村得志（在任期間：1936. 8～）、波木周治（在任期間：推定1940～）、中原正行（在任期間：推定1941～）、林毅木（在任期間：1941年以降）の4人のみである（註2）。

3. 文献から読み解く陸軍船橋送信所

3-1. 陸軍船橋送信所の設置経緯

『日本無線史第九巻』²⁾には先述の通り、「周囲は逐次都市化し、地域狭小大拡張に適しなくなったこと」、「附近住民の放送聴衆に妨害を与えること」、「市街地内に在り防空上の弱点あること」の三点より、中野からの送信所の移転が検討されていたと書かれている。航空写真でも、少なくとも1931年から拡張できるような敷地は見当たらないことが確認できる。

予算問題で遅れ、1943年に移転計画が決定され、千葉県千葉郡二和村で着工、兵力までも投入したものの、資材難などで終戦には間に合わなかった。

陸軍船橋送信所のあった船橋北部は、南部の軍需工場地帯とは異なり田畑が多く、散発的な空襲があるのみで、被害はほとんどなかった。そのため空襲を避け、設備を拡張する

には良い土地であったと考えられる。また、船橋は千葉や佐倉などの軍事都市とも近く、東京との連絡も可能で、鉄道による輸送も行えることから好都合であったのだろう。

3-2. 航空写真

航空写真は、米軍の偵察機が日本本土に写真撮影に飛んでくるようになった戦争末期に多く存在している。

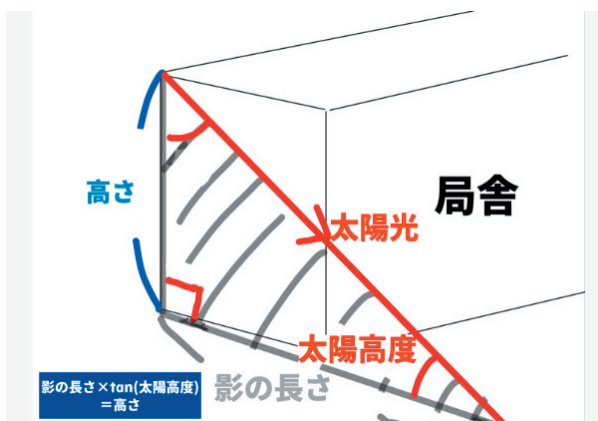
〔図1〕を眺めると、大きな建物が三棟と小さな建物が多数分布している。

大きな建物A・B・Cは主要局舎で、BとCの間はコンクリート製の通路でつながっている。建物Eはその形状から給水塔、D・F・G・Hは規模と散らばり方から倉庫であると考えられる。しかし、HはB-C間をつなぐ通路と同じく、(国土地理院 地図・空中写真閲覧サービスをもとに筆者作成)

以上のことから、A～Cを局舎、D・F・Gを倉庫、Eを給水塔、Hは用途不明の建築物、a～lは兵舎、mは兵舎附属倉庫、n・oは用途不明の建築物と仮定して考察することとする。



〔図1〕 陸軍船橋送信所の空撮



〔図2〕 建物規模の算出方法（筆者作成）

※ $\tan \approx 0.48773258856$ として計算。最後に四捨五入した。

次に建物の規模を考察していく。規模の算出は〔図2〕を基にした。算出結果は〔表1〕のようになった。建物の規模が相対的にわかり、建物の役割が明確になってくるだろう。

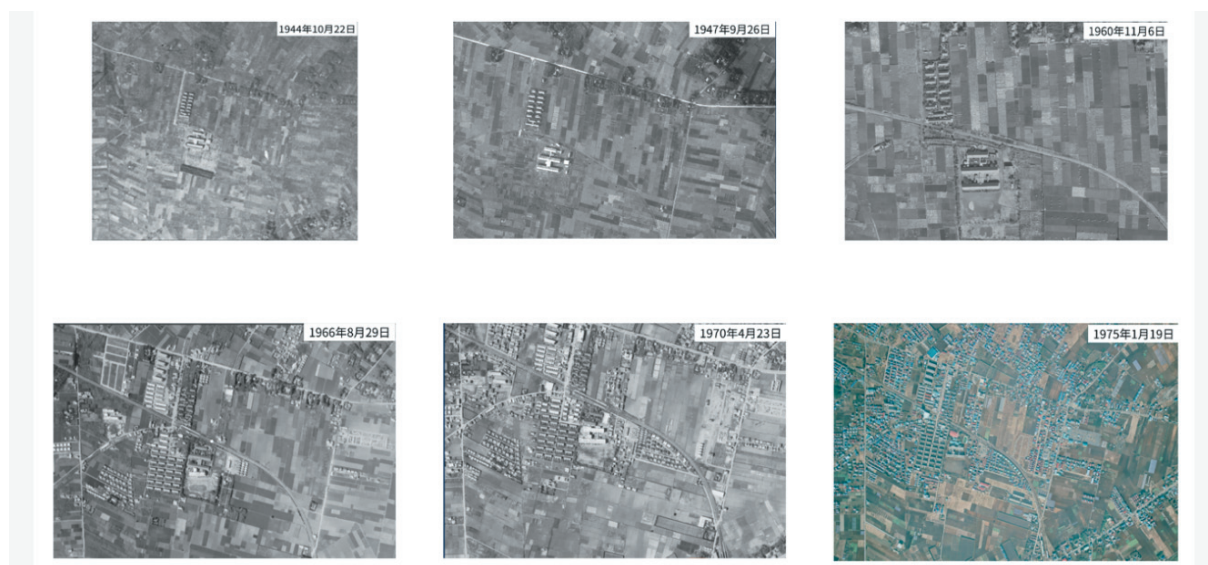
また、〔図3〕からは戦後、兵舎建物は住民に払い下げられ、当初はそのまま住んでい

[表 1] 主要建物の規模

(兵舎除く)

建物名	建物の縦の長さ	建物の横の長さ	影の長さ	太陽高度	建物の高さ
A	12.64	40.61	8.16	26	3.98
B	12.64	73.89	27.95	26	13.63
C	12.64	73.89	27.95	26	13.63
D	8.58	4.73	6.27	26	3.06
F	6.66	14.4	8.67	26	4.23
G	14.46	4.26	8.19	26	3.99
H	12.64	15.7	20.94	26	10.21
I	9.57	4.26	7.21	26	3.52

る住民も、段々区画ごとの建て替えが進んだことがわかる。旧局舎も三咲小学校に払い下げられてから1960年代からコンクリート新校舎への建て替えが始まったことも確認できる。



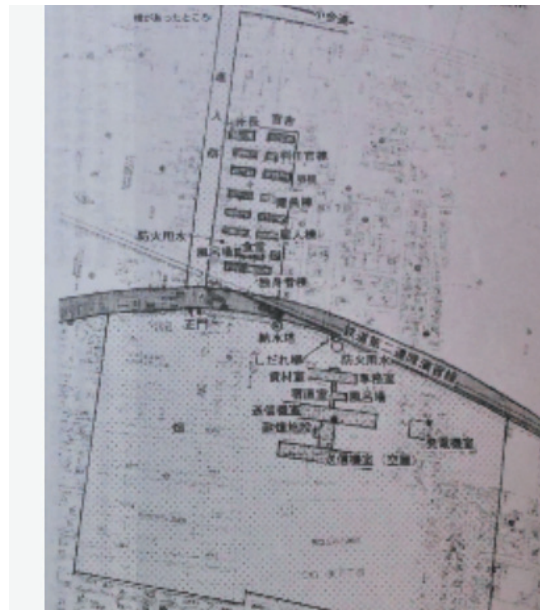
[図 3] 各年代の陸軍船橋送信所の空撮
(経過がわかるように約5年間隔で選別した)

4. 現地調査

これまでの研究では得られる情報が限られていたため、遺構の有無の調査、跡地の利用の調査、そして昔から住んでいらっしゃる方、またはかつて勤めていらっしゃった方の家族からの情報収集という目的で現地調査を行った。

4-1. 跡地調査

陸軍中央無線電信所船橋送信所があったのは、千葉県船橋市二和地域である。その跡地には現在、船橋市立三咲小学校が立っている。かつて走っていた陸軍鉄道第二連隊（註4）の演習線跡地には現在、新京成電鉄が通っている。現地調査では[図4]を使用した。



〔図4〕 陸軍船橋送信所地図
（『船橋の地名』^{4）}より抜粋）

・兵舎跡地

兵舎跡地は当時の区画がほとんどそのまま残っていた。そこには、戦後建てられたであろう住居がたくさん建っていた。また、後述の木内家のように旧兵舎が壊されずに残っている建物もいくつか見られた。これらは片方の壁がトタンのようなもので塞がれており、前述の航空写真から見ても住宅地の分譲のために元々の建物を部分的に切断、売却していたと考えられる。また、国有地であることを示す、財務省関東財務局の看板が建てられた空き地もあり、これを裏付けていると考える。

・局舎跡地

局舎跡地には現在、船橋市立三咲小学校が位置する。校舎の位置関係や大きさは旧局舎にかなり似ている。敷地内に遺構とわかるものはあまりなく、かつての礎石の一部かもしれない石ブロックやコンクリート筒を発見した。このコンクリート筒は直径3mほどのもので、分厚いコンクリートで作られていた。内部は荒れ、草木で埋もれていて状態は良くはなかった。当時の地図と比較して、旧陸軍船橋送信所時代に設置された防火用水の後だと考えられる。

・陸軍鉄道第二連隊演習線跡地

陸軍鉄道第二連隊演習線跡地は、そのほとんどが新京成電鉄線として使用されているが、[図4]からもわかる通り、新京成電鉄が通らなかった部分もある。演習線の線路跡地の脇には「陸軍」と書かれた境界石がいくつも確認できた。

また、三咲小学校周辺には公務員住宅や、国有地を払い下げられたと考えられる大きな

アパート群が点在しており、陸軍の敷地は局舎群と兵舎群の周辺以外にも広大な面積を誇っていた可能性が考えられる。

4-2. 周辺住民へのインタビュー

航空写真から当時の建物に近い屋根をした建物何軒かに目星をつけ、一軒一軒確認すると、二和向台駅北側地域に住んでいらっしゃる木内美和子様にお話を伺うことができた。木内様は、戦後払い下げられた旧陸軍中央無線電信序船橋送信所兵舎、[図1]の建物kに住んでいらっしゃった。以下はお話をまとめたものである。

木内様のお父様は埼玉県陸軍入間基地で陸軍技官として無線電信に携わった。1941年以前に上海に出兵し、日本へ帰ってきた後1942年に新京・奉天へ出張した。その後、1943年以前に「陸軍船橋航空無線送信所」に転属した。戦中の食糧不足により、船橋送信所では周辺を畑に開拓して陸稲と麦を育て、各兵舎では庭で家庭菜園を作って自給自足の生活を送った。また、戦争末期には防空壕の建設も行われた。船橋送信所には木造の建物のほかに、給水塔があった。給水塔は周辺を通る豊富で品質の良い地下水脈を使用していて、少し前まで残っていた。陸軍船橋送信所での待遇はとても良く、住民との関係も良好で、住民が兵隊さんだと聞いて野菜などを持ってきてくれるほどであった。

現在住んでいらっしゃる建物はかつての職員用の建物で、お父様が転属された1943年ごろから住んでいるそうで、戦後国から払い下げられて今も住み続けているという。また、昔から兵舎に住んでいる人で今も残っているのは木内さんも含めて4人だけとのことであった。

木内様のお話によれば、陸軍が船橋へ送信所の移転を決定した1943年以前にすでに陸軍の送信所が存在していたという。また、「陸軍船橋航空無線電信所」とされる施設はどの文献にも存在せず、周辺に大きな飛行場はなかったはずであるので、詳細はわかっていない。

5. アンケート調査

陸軍船橋送信所に関する現状はよいものではない。本格的な研究はなく、地域住民も跡地に立つ小学校の関係者も日本軍の施設があったという認識にとどまる。本研究にあたって、歴史教育に携わる方々、郷土史家などにお話を伺ったがそもそも存在を知っている人はとても少なかった。なぜ、ここまで知られていないのか、それを探るためにアンケート調査を行った。調査の項目は以下の二つである。

- (1) 「兵器」だと思うものを選んでください。
- (2) 「兵器」とはなにをするものだと思いますか？

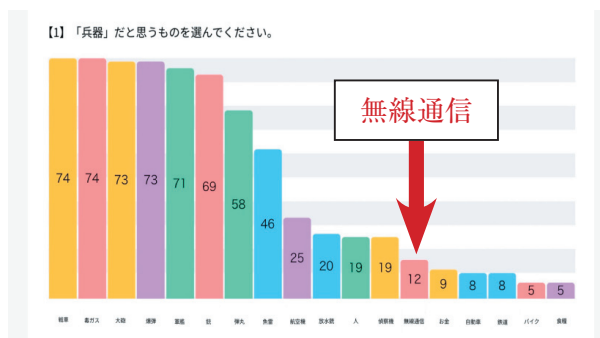
また、調査に先立って以下の仮説を立てた。

「無線施設は軍事機密を取り扱うため秘匿性が非常に高く、地域との結びつきが弱い
え、陸軍中央無線電信所船橋送信所の完成は終戦に間に合っておらず、「戦争遺跡」と
しての存在が認知されていないのではないか。」

結果は以下の通りである。回答人数は75人である。

(1) 「兵器」だと思うものを選んでください。

戦車や大砲など一般的に兵器とされる物
はほとんどの人が「兵器」だと認識してい
るようだが、無線機については約6分の1に
とどまった。これにより、そもそも陸軍船
橋送信所が戦争遺跡として捉えられていな
かったのかもしれない。



(2) 「兵器」とはなにをするものだと思いますか？

前問では無線機が兵器としてはあまり認識されていないというのが分かった。明らかに兵
器と分かる戦車や大砲や戦艦は司令部の命令が無線機によって伝えられる。本問ではこの
ような理由から「兵器」の定義とはなにか聞いた。

結果は以下の通りだ。

- ・人を殺すもの
- ・殺傷に長け、殺傷のみが用途
- ・財産を傷つけるもの
- ・敵を攻撃する
- ・戦争で使う（侵略・防衛）
- ・生物を直接・間接的に傷つけるために作られる

戦争での使用に関わらず、直接的に生物を殺傷する物、その目的で作られたものという
意見が多い。つまり、無線通信は間接的にしか作用しないため「兵器」との認識からは外
れた可能性がある。

以上より、無線通信は戦争において間接的殺傷にとどまるため「兵器」としての認識が
広まらず、戦争遺跡としての認識がされていないと考えられる。

6. おわりに

6-1. 沿革

これまでの研究をもとに陸軍中央無線電信所の沿革をわかる範囲で作成した。

1921年10月	前身である陸軍中野無線電信所が中野電信隊（註5）構内に完成
1925年	中野無線電信所-天津無線電信所間開通
1936年8月1日	中野無線電信所を廃止
	陸軍中央無線電信所 開所
	木村得志陸軍工兵少佐が陸軍中央無線電信所長に就任
1940年ごろ	中野送信所の移転が検討される
	波木周治陸軍工兵少佐が陸軍中央無線電信所長に就任
1941年10月	中原正行陸軍工兵少佐が陸軍中央無線電信所長に就任
1941年12月前後	林毅木陸軍工兵少佐が陸軍中央無線電信所長に就任
	開戦に伴い電報取扱数増加
	予備送信所の設置を検討
1942年	近衛師団経理部によって「中央無線電信所船橋送信所建築工事」が始まる
1943年	送信所を中野から船橋へ移転することを決定
（同時期？）	受信所を調布から川越へ移転することを決定（註6）
1945年8月15日	終戦
	船橋送信所は急いで建造を進めたものの未完成に終わる
	川越受信所は敷地買収もできずに終戦を迎える
1945年9月	船橋送信所が初めて正式電波を発信
	船橋送信所が復員事業に従事
1946年3月31日	船橋送信所が復員事業終了

6-2. 保存へのヒント

多くの人に陸軍船橋送信所の存在と歴史を知ってもらうには何が有効だろうか。

前項より、無線通信施設は戦争遺跡として認識されにくい。

また、陸軍船橋送信所は完成が終戦に間に合っていないため、作戦送信を行っていない点で他の無線通信施設に比べ戦争遺跡としての価値が小さい。つまり、知ってもらうためには、新たな価値づけを行う必要がある。

『船橋の地名』⁴⁾によれば、「終戦以後はほかの陸海軍施設と同様に米軍の管理下に置かれたわけですが、この船橋送信所は、政府と米軍との協定により復員業務に使われることになりました。復員省に移管され、船橋送信所もその業務を行いました。」とされる。

陸軍船橋送信所の価値、それは戦争のために建設されながらも戦争に関わる作戦送信を

行わず、復員事業に従事して多くの命を救ったことである。私はここに価値を見出し、研究を続けている。戦後の混乱で資料も残っておらず、関係者のご家族への聞き取り調査が唯一の情報源であるが、全貌を解き明かしていきたい。

7. 参考文献

1. 滝口昭二 著『行田無線史 天に聳ゆる無線塔 総集編』(滝口昭二、2019年)
2. 電波監理委員会 著『日本無線史 第九巻』(電波監理委員会、1951年)
3. 『服務規程改定の件』(アジア歴史資料センター、レファンスコード：C01000409800)
4. 滝口昭二 著『船橋の地名第31号～第60号』(船橋地名研究会、2015年)

・三咲ふるさとづくり推進委員会記念誌部会 著『三咲開墾記念誌150th』
(三咲ふるさとづくり推進委員会、2019年)

・「航空写真（1944年10月22日）」

地図・空中写真閲覧サービス、(8912) - (C3) - (230)

・「航空写真（1947年9月26日）」

地図・空中写真閲覧サービス、(USA) - (M515-A) - (122)

・「航空写真（1960年11月6日）」

地図・空中写真閲覧サービス、(KT60ACZ) - (C8) - (35)

・「航空写真（1966年8月29日）」

地図・空中写真閲覧サービス、(MKT664) - (C4) - (18)

・「航空写真（1970年4月23日）」

地図・空中写真閲覧サービス、(MKT704X) - (C4) - (10)

・「航空写真（1975年1月19日）」

地図・空中写真閲覧サービス、(CKT7413) - (C8A) - (6)

(註)

1. 八月十五日の無条件降伏によって、国内のすべての軍事施設は駐留軍(GHQ)の管理下に入りました。東京通信隊船橋分遣隊船橋送信所もまた海軍最大の通信基地でしたから、二和向台にあった陸軍船橋送信所とともに当然駐留軍管理下に入ったのでした。
2. 陸軍公文書を時系列順に整理し、責任者名を追うことで責任者交代のおおまかな時期がわかる。
3. 運輸通信省とは、1943年11月に鉄道省、逓信省と商工省、内務省、文部省の一部が統合して設立された中央官庁。総合的な交通関係官庁を目指したが、機構が複雑であったため、1945年5月に、廃止された。『服務規程改定の件』が昭和17年のものなので、設立を見越して改定したものと思われる。
4. 鉄道第二連隊とは、現在の千葉県津田沼市にあった、軍の兵站確保のための鉄道敷設を担う部隊の一つ。

5. 中野電信隊とは、中野に設立された通信を担う部隊。軍事における通信の重要性が高まる中で電信連隊、電信第一連隊と改編されていった。
6. 調布受信所には付近に飛行場建設の計画が立てられ、一度川越市付近に移転を決定したが、飛行場建設が不要不急と判断されたため、調布受信所はそのまま使用され、川越市の移転予定地は買収もされずに終戦を迎えた。